

## 長崎法潤先生を偲んで

山 本 和 彦

二〇二〇年七月一日、長崎法潤先生がお亡くなりになられた。享年八六歳であった。先生は四月一日のお生まれなので、訃報を聞いたとき、先生らしい日を選ばれたと思った。法名はナーランダで学ばれたことにちなんで、那蘭院釋法潤である。

先生は、一九三四年四月一日新潟県西頸城郡、現在の糸魚川市の真宗大谷派の寺院でお生まれになった。一九五三年に大谷大学文学部に入学されてから、一九九九年に大谷大学を定年退職されるまで約半世紀の間、大谷大学で人生を過ごされた。大谷大学大学院文学研究科仏教学専攻修士課程、さらに同博士課程へ進学され、一九五九年から一九六四年までインドのナーランダ・パーリ研究所へ留学された。帰国後一九六四年に大谷大学助手となられ、専任講師、助教授、一九七九年に教授となられた。一九八六年には『ジャイナ認識論の研究』という題目で文学博士の学位を大谷大学から授与された。一九九八年には故宇野惇先生の後を継がれて、ジャイナ研究会の会長となられた。一九九九年に定年退職され、大谷大学名誉教授となられた。定年後はいろんな仏跡に調査旅行をしたいと、うれしそうに話されていたことがいまでも鮮明に思い出される。

先生のご専門は、パーリ語仏典とジャイナ教の認識論である。学生時代は故舟橋一哉先生のゼミでパーリ語仏典の研究をされていた。インド留学中は故サトカリ・ムーケルジー先生の指導のもとで、仏教徒のダルマキールティの『プラマーナ・ヴァールツティカ』とジャイナ教徒のヘーマチャンドラの『プラマーナ・ミーマーンサー』の研究をされていた。一九八八年に平楽寺書店より出版された『ジャイナ認識論の研究』は、先生の博士論文が元になっている。従来、ジャイナ教研究は仏教のパーリ語經典とジャイナ教のアルダ・マーガデーー經典という原始經典同士の比較研究が主であった。先生が扱われた十二世紀の認識論・論理学のジャイナ教テキストの解説研究は画期的な業績であった。

先生の研究方法は、かつちりとした文献学であった。テキストを正確に校訂し、深く読み込み、意味が通るように訳出し、縦(時代)と横(他学派)を意識して解説する。先生の門下生は全員、この厳密な研究方法を学んだ。長崎ゼミからはたくさんの門下生が巣立った。面白いことに、専門分野が全員異なっている。サンキヤ学派、パーニニ文法学、パーリ語仏典、ウパニシャッド、ジャイナ認識論、新論理学などである。先生の温厚な人柄が、学生を育てたのである。

いつも温厚で、指導も丁寧であった。仏さまのような先生であった。先生はいつも学生のことを菩薩だと仰っていた。大谷大学らしきとは、こういう師弟関係のことかもしれない。

二〇〇五年出版の『長崎法潤博士古稀記念論集 仏教とジャイナ教』の編集をしているときに、先生のお人柄がよくわかった。執筆依頼した先生のほぼ全員が快諾され、四八本の玉稿を掲載することができた。執筆者の顔ぶれを見ると、先生の交友関係の広さがよくわかる。先生の後任として、ジャイナ教研究会の会長の職を引き受けて頂いた山崎守一先生の論文を日本語論文の巻頭とした。英語論文の巻頭はジャイナ教研究のスペシャリストである矢鳥道彦先生のものとした。矢鳥先生の論文は真教が依頼よりも超えていたが、一番に原稿を頂戴したのでそのまま掲載した。

「序」は日本語が上手い故浅野玄誠先生にお願いした。「あとがき」は匿名で山本が書いた。リチャード・ゴンブリッジ先生の最初の原稿は日本に到着せず、お願いしてもう一度送っていただいた。依頼していない先生から書きたいという要望があったが、頁数の関係ですべてお断りせざるを得なかった。断腸の思いであった。編集員全員が先生に恩返しをしようと必死に頑張った。「あとがき」にも書いたが、特に当時平楽寺書店の藤田貞弘氏には本当にお世話になった。心が折れそうになった私を最後まで支えていただいた。出版までの数年間はこの編集作業で燃え尽きた。

この編集を通して、不思議なご縁をたくさん感じた。

先生には定年後も非常勤講師として、大谷大学での授業をお願いしていた。大学院の授業では『スッタニパータ』を読まれていた。九〇分間で一行ぐらいのペースであった。それほど深く読み込まれていた。学生にとっては、よい修行になったであろう。先生が『スッタニパータ』を講読されていた理由は、研究を始めた最初のところに戻りたかったからだと仰っていた。先生はご自身の学生時代を思い出されたのかもしれない。

御葬儀はご自宅での家族葬であった。毎年新年会でお世話になっていた思い出の部屋で行われた。導師は門下生の一人がとめた。先生の周りには門下生が集合した。本当に先生との深い縁で結ばれた人間で先生を送り出した。涙はなく、素晴らしいお別れの会であった。先生の生前に積まれた徳が、明るい光となって部屋を照らしていた。浄土へ旅立つというのはこういうことかと実感した。

個人的なことであるが、不思議なことにパーリ語との縁が数年前に復活していた。私が審査の主査を担当する学生の博士論文がパーリ語文献を使ったものであった。審査しなければならぬので、数十年ぶりでパーリ語文献を読んだ。遠い記憶が蘇ってきた。さらに別の学生が修士論文でパーリ語文献を扱うことになった。一緒に講読してみた。すっかりパーリ語仏典の世界に引き込まれてしまい、一人で『スッタニパータ』を読んでみた。先生を通してブツダを感じた。先生との強い縁を感じた。この文章を書いている間も先生の言葉が思い出される。「自分の頭で考えなさ

い。考えて考えて考え抜きなさい。それを論文にしなさい」。

長崎先生、長い間お世話になりました。感謝の気持ちしかありません。本当にありがとうございました。（追記 本  
追悼文は、『ジャイナ教研究』第二六号に掲載したものを加筆・修正したものである。転載を許可いただいたジャイナ教研究会  
会長の藤永伸先生をはじめ関係者の方々にお礼を申し上げます。）